

二〇一六年二月二日

杖借りて陝塔登る紅葉寺
歳時記に薄き母の名灯親し
枝先に残る紅葉の命かな
散紅葉浮かぶ閼伽井の水を汲む
天辺の明るくなりし枯木立

二〇一六年二月一日

山門に匂ひ漂ふ大根焚
寺苑いまどの径とるも散紅葉
風の意に従ふ木の葉しぐれかな

二〇一六年二月三〇日

冬天を支へ楼門仁王立
風に瘦せ日に色深め吊るし柿
火のごとく修道院のもみぢ燃ゆ
パノラマに錦繡綴る四圍の嶺々
神還るらし東雲の空染めて

二〇一六年二月二十九日

単線の離合待ちなる駅小春
黄落の径自転車を押し歩く
柿をもぎつくされ裸木となんぬ
小魚の飛び跳ねてゐる川小春
朝採れの露にまみれし野菜買ふ
白壁の蔵に影して冬木立
一末寺古りし井桁に大根干す

やよい
たか子
ともえ
明日香
ぼんこ
なつき
ひかり
たか子
はく子
やよい
なおこ
明日香
よし女
たか子
有香
菜々
まゆ
さつき
治男
こすもす

二〇一六年二月二八日

まなかひに海坂展け松手入れ
靴沈むほど堆く散紅葉
七人の敵無く夫の日向ぼこ
老人で混む待合ひや日短
銀杏散り尽くして峡の夕日落つ
湯豆腐や異人の客のおもてなし

二〇一六年二月二七日

身に沁むや震禍の町をバスツアー
矢刀の折れしごとくに蓮枯るる
作業疲れ癒す早風呂ゆず浮かべ
早口のガイドに疲れ紅葉狩
山壁に雲を残してしぐれ去る

二〇一六年二月二六日

青野菜畝にひれ伏す霜の朝
みちのくの露天湯に秋惜しみけり
一穢なき禅寺の庭紅葉散る
石畳五彩の紅葉散り敷きて

毎日句会みのる選・二〇一六年二月四日

さつき
こすもす
たか子
満天
菜々
宏虎
せいじ
ぼんこ
よし女
なつき
はく子
宏虎
せいじ
あさこ
ぼんこ